

平塚市立松原小学校

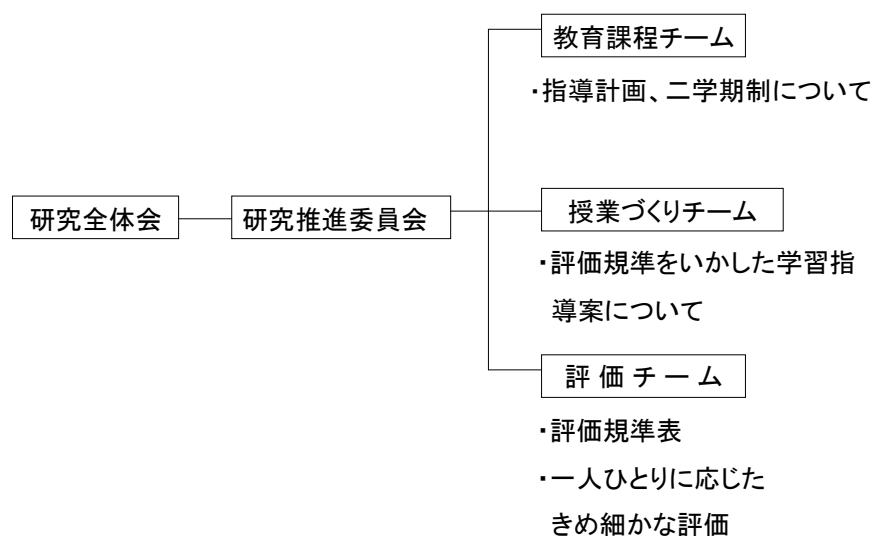
研修テーマ

「確かな学力」を育む学校の創造 ～二学期制をいかして～

ねらい

- ① 「生きる力」の知的側面である「確かな学力」を育てる学校づくり
- ② 二学期制をいかした本校の教育課程編成の研究

1 組織図



2 研修計画の概要

年度	内容
平成16年度	*評価規準表（算数）の作成 *新学習指導案による授業実践 *通知票の検討 *授業公開、実践報告（中地区教育課程総則部会）

3 特色

- ① 教職員のモチベーションを高める工夫（教育課程、授業づくり、評価の三つの研究組織）
- ② 個に応じた確かな学力の定着と伸長を図る実践的な指導のあり方を追究
- ③ 教職員全員の協力によるカリキュラム開発

4 成 果

① 新学習指導案による授業実践

新しい形の学習指導案を、横浜国立大学高木展郎教授の考え方を参考に作成した。育成すべき学力→評価規準→評価方法→学習活動→教材という流れで、学習指導案のモデル形式を作成し、授業にいかした。

② 算数科評価規準表の作成

評価を児童の向上にいかし、目標に準拠した評価を行うために、その客観性と信頼性を確保する評価規準を国立教育政策研究所の資料を参考にして作成した。規準表は、単元目標、評価規準、指導時数、学習活動が一覧できるように工夫した。

③ 個に応じた指導

算数科で少人数指導を取り入れた。児童と保護者が学習のペースを考え、コースを選択する。じっくりと段階を踏んで学習するコースや発展的問題も含め、様々な問題にチャレンジするコースを設置した。

④ 二学期制の研究

学習指導、学校行事、通知票の内容、教育相談の実施、小・中の連携、児童、保護者、地域への対応について研究し、一人ひとりに応じたきめ細かな指導と評価、落ち着いて学習に取り組める特色ある学校づくりをめざした。

5 課 題

① 確かな学力を育む学校を創造するためには、日々の授業が充実していること

「確かな学力」について、「知識・技能」に加え、「学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力まで含めたもの」であることを全教職員で確認し、その育成を図る。授業の充実こそが学校に活力をもたらすので、今後一層研究に取り組みたい。

② 学習指導要領の「基準性」の一層の明確化

目標に準拠した評価の課題は、評価における客観性と信頼性の確保にある。評価が恣意的になったり教員の主観に基づいたりすることなく、共通の手続きに従って行われることが必要である。

③ 新しい学習指導案による授業研究

次のような手順で事前研究を中心とした授業研究をすすめ、授業改善を図る。

- ア 授業計画を共同で作成する
- イ 教材研究を共同で行う
- ウ 学び手の研究・情報交換を共同で行う
- エ 評価規準を共同で設定する
- オ 授業計画を共同で立てる

④ 「総合的な学習の時間」の充実

各学級で児童の主体性をいかしながら、年間指導計画を作成している。今後も、全体計画に基づき指導を展開し、育てたい力が児童に確実に身についたかどうかの評価を行い、その検証結果を再び全体計画にいかすような研究を進めたい。

茅ヶ崎市立第一中学校

研修テーマ

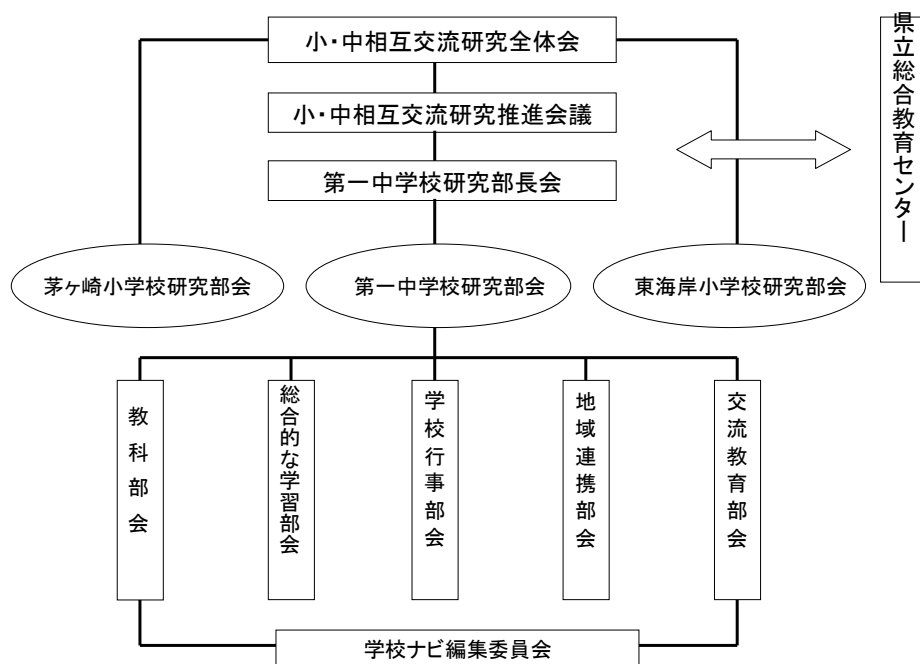
豊かな心と実践力をもった「一中生」のいる学校づくり

～小・中相互交流を土台とした新しい学校の創造をめざして～

ねらい

- ① 学校のありのままの姿を保護者や地域に発信する。
- ② 中学生の活動を地域にも広め、多くの方々の力を借りながら、学校改善の方策を探る。

1 組織図



2 研修計画の概要

年度	主な内容
平成16年度	<ul style="list-style-type: none"> *研究組織確認 *学校ガイドブック編集会議 *全研究部会、校内研究研修会、校内研究全体会 *実態理解アンケート実施・集計・報告 *小中交流会議 *小中連携相互交流研究全体協議会 *「特別支援教育」学習会 *シラバス作成

3 特色

- ① 小・中学校連携を基礎に、家庭や地域社会との協働による学校づくりの推進
- ② 『一中のまナビ』（学校ガイドブック）の作成
- ③ 保護者や地域住民との協働の具現化及び学校づくりの新たなスタイルの構築

4 成 果

① 教科

学習目標・指導・評価を一体化させるためには、先ず教科内で十分な検討と協議が必要である。明文化したものを教員相互で確認することで、自らの授業を改善する視点が明らかになった。

② 評価

二学期制を導入するにあたって、学校での学習状況を家庭に連絡する手段が少なくならないように配慮し、生徒や保護者が抱く不安を軽減させるために、新たに工夫した学習状況連絡票や新通知票を作成した。

③ 「総合的な学習の時間」

実施にあたって、地域や保護者の教育力を積極的に取り入れていくようにした。また地域の力を借りるだけでなく、地域の一員として活躍をするような場を設けた。

④ 学校行事

体育祭における小中交流種目や小学校への出前合唱と合唱リハーサルに小学生が参加した。

⑤ 地域行事への参加

学区にある二つの推進協主催のそれぞれの行事に、生徒会が中心となって参加した。中学生にとっては、自分たちの企画をいかせる場となり、地域の人達から信頼されたことに喜びをもって参加していた。また、小学生との交流が図れた。

⑥ 地域連携

生徒がまとめた防災パンフレットを自治会長をはじめ、地域の方々や保護者に配布することができ、たくさんの人たちから喜ばれた。

⑦ 交流教育

地域の方と交流し、茶道を体験した。また小学校との交流も図れた。

5 課 題

① 生徒実態理解アンケートの結果からもみえてきた「授業改善の方策」

学校は地域と協働するという視点から、保護者・地域と手を携えた学校づくりを展開していく。

② 『学習ガイダンス集』を詳細にした『シラバス集』の発行

『学習ガイダンス集』について、生徒から「評価・家庭学習・テスト前の学習」を、もう少し詳しく、わかりやすい言葉で説明してほしいとの要望が寄せられている。今後、評価も含めて生徒の要望に応え、『シラバス集』を作成し、発行していく。

③ 「評価」についての考え方を学校として確立

「評価」そのものについて検討する。授業を見直し、生徒の実態に即したカリキュラムの編成を図る。

④ 「総合的な学習の時間」

何をして、どのような力がついたのか、生徒個々の評価方法を検討する必要がある。

⑤ 特殊学級の生徒と通常学級の生徒や地域の方との日常的で自然な交流の促進

今後も日々の自然なふれあいをめざして、情報交換を進め、相互理解を深めたい。特別支援教育の理解については、まだ十分に職員全体に広がってはいない。今後の課題である。

県立横浜桜陽高等学校

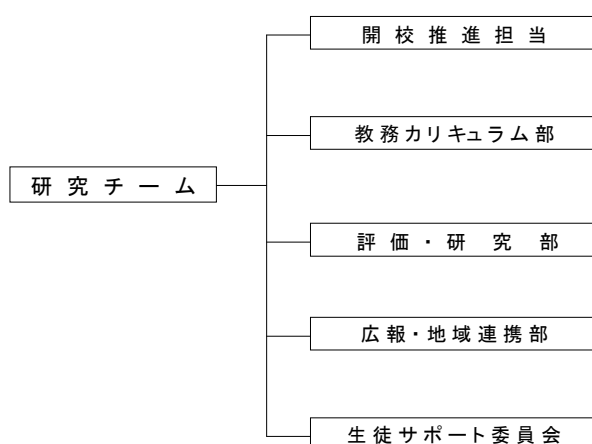
研修テーマ

横浜桜陽高等学校のフレキシブルスクールとしての教育活動
～個性を伸ばし、確かな学力をつける教育活動の実現に向けて～

ねらい

- ① 自己の適性に応じた得意科目の伸長
- ② 自己のペースによる基礎的な学習や発展的な学習の充実
- ③ 一人ひとりの生活スタイルに応じた可能性の開拓をめざした、柔軟な学びのシステムの構築

1 組織図



2 研修計画の概要

年 度	内 容		
平成16年度	＊本校のグランドデザインの中核となる事項の実践内容の検証 ・単位制の仕組みを最大限生かした自分で作る時間割 ・進路希望を実現するための充実した科目展開 ・学校外での学習活動 <table style="display: inline-table; vertical-align: middle; margin-left: 10px;"> <tr> <td style="font-size: 2em;">{</td> <td> 高大連携・高専連携 インターンシップ 技能審査 ボランティア活動 </td> </tr> </table>	{	高大連携・高専連携 インターンシップ 技能審査 ボランティア活動
{	高大連携・高専連携 インターンシップ 技能審査 ボランティア活動		
	＊生徒による授業評価の実施結果の検証 ・評価票分析		

3 特 色

- ① 学校のグランドデザインを共有化し、生徒による授業評価をいかした特色ある学校づくり
- ② フレキシブルスクールとしての学校像の形成

4 成 果

- ① 本校のグランドデザインの中核となる単位制の仕組みを最大限いかした自分で作る時間割
1年次からすべての科目を選択できるような仕組みで運営し、年間に履修する科目を自分で選択できることにより、得意科目の履修時間数を他の科目に比べて多くすることなど、生徒が自分でデザインすることが可能になり、得意科目の伸長に効果がある。

② 進路希望を実現するための充実した科目展開

6つの特色ある系（情報ネットワーク系、環境サイエンス系、福祉サポート系、健康フィットネス系、国際コミュニケーション系、教養(芸術)アート系）を用意し、生徒の進路決定の手助けになるような様々な科目を提供している。生徒が引き続き学習できるように上級科目を追加設定することもできる。

③ 学校外での学習活動

(高大連携・高専連携)

1年次から挑戦できることから、積極的に受講している。強い動機を持った生徒の場合、講義にも積極的に取り組むので、大学側からも大学生よりもしっかり学習すると好評である。

(インターンシップ)

単位認定を伴うものであるため1、2日程度の体験的なものではなく、夏休み中の連続する5日間を、企業に勤めている人と同様（8:30AM～5:00PM）に勤務するものである。これを体験することにより、その職業への理解と適性が判断でき、その後の進路決定におおいに役立っている。

(技能審査)

単位を認定することから数多くの生徒が検定試験に挑戦するようになった。その結果さらに上の級をめざして努力する生徒が増え、授業に積極的に取り組むようになった。

(ボランティア活動)

特別養護老人ホーム「しらゆり園」と「県立ふれあいの村」に、生徒のボランティアの場所として協力をいただいている。また、協定書のない施設等でのボランティア活動についても事前審査の上、公的な機関及びそれに準ずる機関による活動の証明ができることが確認できれば、単位の認定をしている。

④ 生徒による授業評価

前期、後期に分け、授業について生徒自身が意欲的に取り組めたか、理解できたか等、今後の授業をより良くしていくために、授業の実施内容について調査した。分析の結果、授業の準備・工夫は前期に比べて向上した。

⑤ グランドデザインの作成

フレキシブルスクールとしての本校のめざすべき学校像を全体で作成し、「個性を伸ばし、確かな学力をつける教育活動」をコンセプトとして作成した。フレキシブルスクールは何でも自由であるとか、単位稼ぎのシステムであるといった誤解をなくし、職員間の認識の共有化を図れた。

5 課 題

① 自分で作る時間割から自分で作るカリキュラムへ

「自分で作る時間割」ということが、自分の好きなものだけやればよい学校という安易なイメージを作っている。個々の進路や適性に応じて「カリキュラムを自分で組み立てる」という趣旨の理解を図る必要がある。

② 徹底した履修指導と選択能力の重要性

「個性を伸ばす」という観点で、得意科目をより多く履修できるように生徒に選択させているが、苦手科目を避けることに利用している部分が見受けられる。何を学習したいのか、何のために学習するのか、理解されるような動機づけが必要となる。

③ 確かな学力をつけさせるための科目構成

得意なものをより伸ばすためには、その科目においてはかなり高度な部分まで踏み込んで学習できる環境の整備が必要となる。

県立大井高等学校

研修テーマ

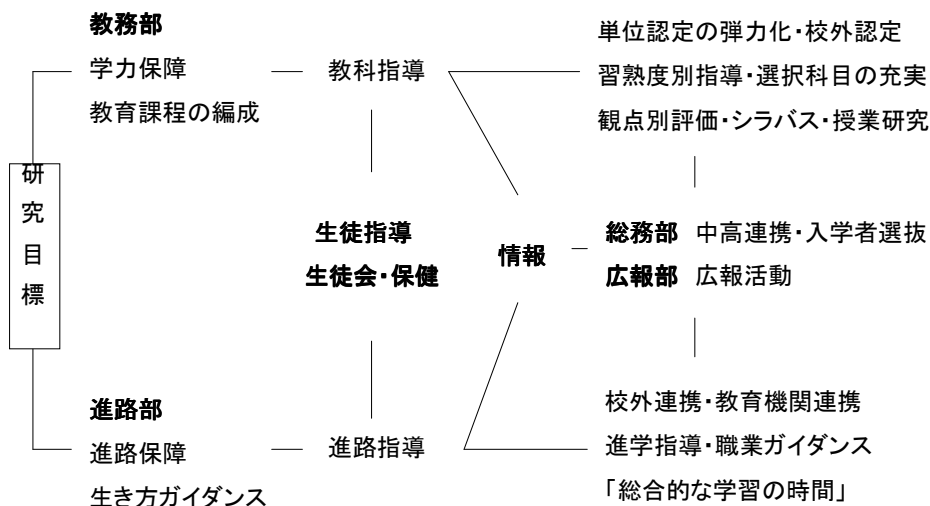
個に応じた確かな学力の向上

～生徒一人ひとりの自己実現に向けた「生きる力」の育成と、そのベースとなる基礎学力の向上～

ねらい

- ① 生徒個々の自己実現・進路実現
- ② 問題解決能力・生きる力の育成
- ③ ニーズに応じた柔軟な学びのシステム

1 組織図



2 研修計画の概要

平成16年度	<ul style="list-style-type: none"> *授業改善と評価 <ul style="list-style-type: none"> ・新評価方法の検討 ・科目単元別評価規準の作成 ・成績通知票の様式見直しと学力調査 ・習熟度別指導と観点別評価の実践校視察 ・中高授業交流と研究会の開催 *教育課程 <ul style="list-style-type: none"> ・フロンティアカリキュラムの完成 ・教務内規の改訂 *総合的な学習 <ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な学習の時間」の実践と見直し ・学校外教育機関との連携 *シラバス <ul style="list-style-type: none"> ・新評価方法の記述 ・フロンティアカリキュラムのシラバス研究 *福祉 <ul style="list-style-type: none"> ・福祉資格取得講座の実践 *分掌 <ul style="list-style-type: none"> ・研究への参画と組織化
--------	--

3 特 色

- ① 学力向上フロンティアスクール
- ② 生徒の実態を踏まえた確かな学力の定着に向けた習熟度別指導や少人数指導の展開
- ③ 計画的な校内研修の展開

4 成 果

- ① 分掌組織改編・学校評価と校内組織の整備
教育界全体を取り巻く状況が大きく変化し、従来の運営方法では対応が難しい状況が生じている。外部評価システムとともに内部評価システムの推進に向けて、現在の業務内容の見直しと組織改編へ取り組むとともに、これからの方向性を模索し、校長の推進する学校目標を具現化するためのモデルを検討した。
- ② 教育計画と組織
学校運営を円滑に推進するため、本校における教育計画にあつては、中期計画を企画・推進する組織の整備と位置づけが課題として挙げられ、短期計画としての教育活動の実践を担うための組織である分掌組織と委員会の整理・統廃合を検討した。
- ③ 授業改善への取組
高校では、各科目担当者の授業に具体的に迫る研究はなかなか実現しにくい土壌がある。しかし、学力向上の視点からすれば授業改善は必須の課題である。今年度は英語、数学の研究授業を通じた研修会を実施し、授業観察週間を設定した。来年度も分析と考察を行い、それに基づいた研究会を企画したい。

5 課 題

- ① 分掌組織改編
 - ・分掌の形態は次年度も継続するが、グループ間連携の方法を工夫する。
 - ・入選委員会及び地域交流業務を広報部に位置づける。
 - ・学校評議員事務局を総務部に位置づける。
 - ・グループ化を強化し、分掌の中に委員会を含めていくことを検討する。
 - ・分掌組織は事務的機能であり、実務は全職員で当たることを原則とする。
 - ・教育計画や教育課程を前提とした分掌機能の定着と充実を図る。
- ② 授業研究
 - ・各教科の授業改善への積極的取組を推進する。手立てとして全教科での研究授業の実施。授業観察週間の徹底。教員用授業観察シートと生徒用授業振り返りシートの活用、観点別評価の改善を図る。
 - ・学力向上に向けた各教科の取組の具体化と実践。学力向上のために、教科担当者全員で取り組める具体的な手立てを考案、実践し、成果のデータを取り検証する。
 - ・小・中・高のカリキュラム接続について検討するため、小・中・高の合同研究会を実現する。

県立津久井養護学校

研修テーマ

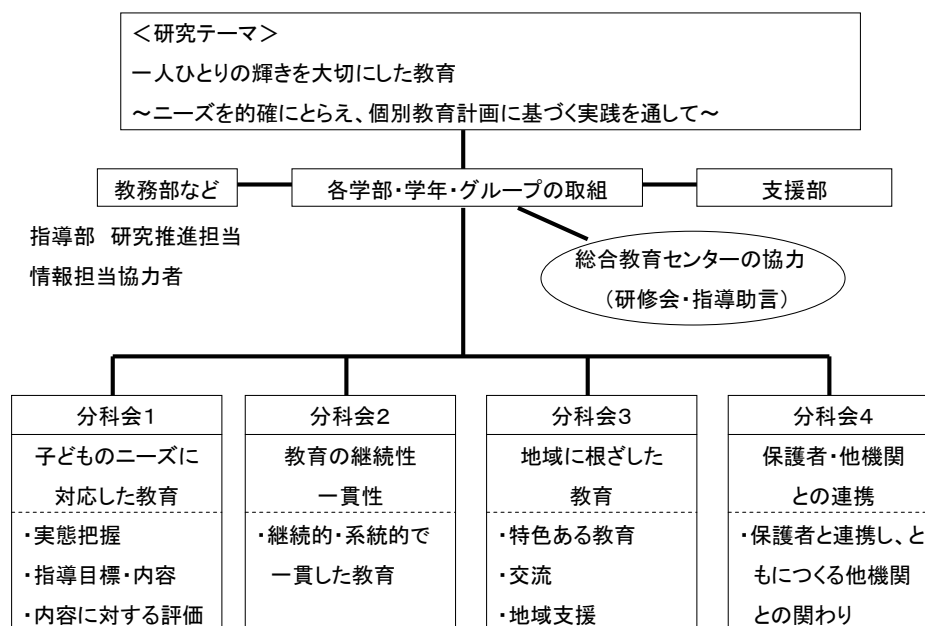
一人ひとりの輝きを大切にした教育

～ニーズを的確にとらえ、個別教育計画に基づく実践を通して～

ねらい

- ① 日々の実践をいかし、授業研究に主体的に取り組む姿勢を培う。
- ② 本校の個別教育計画が共通理解され、充実したものとなるよう研究・研修する。

1 組織図



2 研修計画の概要

年 度	内 容
平成16年度	＊全体研究会 研究推進年間計画について (3回) ＊分科会別 研究会 (4回) ＊全体研究会 (3回) ＊学部・学年公開授業 全体研究会 (小低、小高、中、高 4回) ＊全体研修会 ＊人権・同和研修会

3 特 色

- ① 一人ひとりのニーズに対応した指導の充実をめざした地域の小・中学校との連携の深化
- ② 児童・生徒一人ひとりに応じた「個別教育計画」に基づく教育活動の定着と展開
- ③ 地域との支援体制構築に向けた校内研究活動を核とする教職員による組織的な取組

4 成 果

① 子どものニーズに対応した教育 ～個別教育計画の書式～

様式について検討し、例えば肢体不自由教育課程では、「医療情報・健康」、「生活の基礎」、「感覚・知覚」、「運動」、「コミュニケーション」、「認知する力」に分けた。また「地域との関わり」が年度途中に変化した場合は、以前の状況が分かるような方法で記入することについて案を提示した。

② 教育の系統性・一貫性

個別教育計画に基づく教育実践の充実、系統的で一貫性のある教育をめざすために、「校内尺度表」について分野を絞って研究を行った。「排泄に関する段階別確認表」、「食事に関する発達段階表」、「着脱における発達確認表」により児童・生徒の発達段階を把握し、実態に応じた指導を支援した。

③ 地域に根ざした教育 ～各学部における交流～

各学部で行った1年間の交流と感想、反省と課題についてまとめた。初年度ということもあり、各学部とも手探りの状態で学校間交流を行った。中・高等部のように、生徒の意識の面でも交流する難しさがある学部もあったが、小学部のように多くの学校と交流を行い、人と人とのつながりを深めた学部もあった。

④ 保護者・他機関との連携

医療ケアが必要であり、進路の見通しがもちにくい状況の生徒について、地域の特性を踏まえ、今後の具体的な進路について、学校と保護者（家族）および他機関との関わりを検討することで、諸問題や課題をとらえ、よりよい連携のあり方を考えることができた。

⑤ 全体

新設校であり、昨年8月下旬に移転するあわただしい1年間であったが、全校体制で積極的に研究に取り組んできた。その過程において学級、学年、学部、その他のチームが有効に機能した。

5 課 題

① 子どものニーズに対応した教育

検討した個別教育計画に関する内容を、教務部での改善のための資料としていかしていくこと。また個別教育計画の長期目標の期間について、1年間だけの目標なのか、学部を通しての目標なのか、共通理解を図ることが必要であると考えます。

② 教育の継続性・一貫性

作成した校内尺度表を、来年度は実践にいかし、改良に取り組むことや、尺度表を引き継ぎの資料として使えるように見直すことを考える。

③ 地域に根ざした教育

今年度の交流の課題を踏まえ、来年度は年間を見通した中で取り組み、学校間交流を深め、継続していくことが望まれる。また、居住地交流をさらに広げて行くことも必要である。

④ 保護者・他機関との連携

「個別の支援計画」にある「支援シート」を活用して、保護者のみならず、情報を持っている人々との連携を図ることなどが、必要である。